

## コリント人への手紙第二13章 「建てるための権威」

### 1A 内部の裁き 1-6

#### 1B 力ある方キリスト 1-4

#### 2B 信仰の吟味 5-6

### 2A 完全への祈り 7-10

### 3A 愛と平和の神 11-13

## 本文

コリント人への手紙第二 13 章です、ついにコリント人への手紙、第一と第二の最後に来ました。これまでも多くの問題にパウロは取り組んできましたが、ついに時効が来たというか、悔い改めない者たちに対して、容赦しないという強い言葉を言っています。そうならないように願っている、という言葉も言っています。この章から、主に与えられている権威について見ていきます。キリストご自身にある柔和さ、へりくだりは、その背後に全能の神の力があるということも見ていきます。

### 1A 内部の裁き 1-6

#### 1B 力ある方キリスト 1-4

<sup>1</sup> 私があなたがたのところに行くのは、これで三度目です。二人または三人の証人の証言によって、すべてのことは立証されなければなりません。<sup>2</sup> 以前に罪を犯した人たちとほかの人たち全員に、私は二度目の滞在のとき、前もって言っておきましたが、こうして離れている今も、あらかじめ言っておきます。今度そちらに行ったときには、容赦しません。

パウロは、偽使徒たちに煽られながら、なおかつ悔い改めていない者たちに対峙しなければならないことを話していきます。先週学んだ 12 章の最後で、争い、妬み、憤り、党派心、悪口、陰口、高ぶり、混乱が未だあることをパウロが指摘しました。知的な部分での罪です。そして、淫らな行いや好色も行っている者たちがいて、これは肉欲に関わる罪です。

パウロは、第一の手紙において、この問題を取り組みました。その手紙がコリントに到着したら、正しく応答しませんでした。いろいろな争い、混乱、今、言ったとおりのことがさらに炎上しました。それでパウロは、二度目にコリントに行きます。2 章 1 節で、「あなたがたを悲しませる訪問は二度としない、と決心しました。」と言っています。これは、第一の手紙と第二の手紙の間に訪問しました。そして、罪に対処する手紙を、第一の手紙と第二の手紙で書いているようです(2:3)。

そして、「これで三度目です」と強調しています。なぜなら、申命記にある神の律法、二人または三人の証言によって立証されるということです。おそらくこれは、パウロの訪問の時に二人、三人

の証人がいたということもあるでしょうが、一度、二度、そして三度目の訪問ということで、確かに罪を犯していることを、悔い改めていないことが、三回の証言によって立証される、という意味なのかもしれません。

ここで、パウロの思いの中にあるのは、イエス様が教えられた戒めの言葉です。「マタ 18:15-17 また、もしあなたの兄弟があなたに対して罪を犯したなら、行って二人だけのところで指摘しなさい。その人があなたの言うことを聞き入れるなら、あなたは自分の兄弟を得たこととなります。16 もし聞き入れないなら、ほかに一人か二人、一緒に連れて行きなさい。二人または三人の証人の証言によって、すべてのことが立証されるようにするためです。17 それでもなお、言うことを聞き入れないなら、教会に伝えなさい。教会の言うことさえも聞き入れないなら、彼を異邦人が取税人のように扱いなさい。」教会において罪がある時に、段階を経てそれを行いなさいということ、イエス様は言われています。初めは、二人だけのところに行って指摘します。次に、自分の他に一人また二人です。それでもなお聞き入れないならば、教会が対処します。しかし、それでも聞き入れないなら、異邦人が取税人のように扱います。つまり、教会には属さない人というようにします。

教会の中にある罪に対処するのは、とても辛い作業です。みなが傷つきます。けれども、イエス様が言われたように、教会は聖い所ですから、罪があるならば取り除かないといけません。それは、二つの目的があります。一つは、教会を守るため。キリストがおられることの証しが損なわれます。次に、本人の悔い改めのためです。教会によって守られているものをなくすことによって、自分のしたことの結果を自分自身が受けることによって、罪から離れるようにするためです。

コリントの教会では、パウロの二度目の訪問とその後の手紙によって、悔い改めた人々が出てきました。けれども、それでもまだ悔い改めない者たちがいます。そうすれば、厳しく対処しないとイケないです。容赦しないと書いていますね。パウロは、この第二の手紙を先に託して、それで自分が後に行くようにして、彼らに猶予を与えているのです。

<sup>3a</sup> こう言うのは、キリストが私によって語っておられるという証拠を、あなたがたが求めているからです。

パウロは、彼らの一部にある、挑みかかる態度に対峙しています。パウロが、罪を犯している者たちを戒めていたのですが、彼らはそれを聞き入れようとはせず、かえって、パウロが真の使徒であるのか、という疑いをかけてきています。パウロたちに対して、「お前たちは、私たちの上に立って支配しようとするのか。だれがあなたにそのような権威を与えたのか。」と挑んでいます。そこで、パウロを通してキリストが語っておられるのであれば、その証拠を見せなさい、と求めています。なぜ、ここまで横柄な態度を取れるのか？次を見てください。

<sup>3b</sup> キリストはあなたがたに対して弱い方ではなく、あなたがたの間であって力ある方です。<sup>4</sup> キリストは弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力によって生きておられます。私たちもキリストにあって弱い者ですが、あなたがたに対しては、神の力によってキリストとともに生きるのです。

パウロは、柔和に、謙遜に、優しくコリントの人たちに接していました。使徒としての権威と力があっても、それは、あくまでも人々を助けるため、支えるため、建て上げるために用いるからです。

これがまさに、イエスご自身の姿です。主は、「マタ 12:20 傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。さばきを勝利に導くまで。」とあるとおりです。そして、主は十字架に至るまで、父なる神に従順でした。そこにおいて、敢えて、弱くなられたのです。覚えていますね、主が捕らえられた時に、ペテロは剣で、大祭司のしもべの耳を切り落としましたが、剣をさやに収めなさい、と命じられ、こう言われました。「マタ 26:53-54 それとも、わたしが父にお願いして、十二軍団よりも多くの御使いを、今すぐわたしの配下に置いていただくことが、できないと思うのですか。54 しかし、それでは、こうならなければならないと書いてある聖書が、どのようにして成就するのでしょうか。」主は、瞬く間にそこにいる者たちを滅ぼすことができましたが、敢えて弱くなられました。

しかし、主はそのよみがえりによって、全能の力を現わしました。そして今も、神の力によって生きておられます。使徒ヨハネがパトモス島にいた時に、力強い栄光の姿でイエス様が現れました。髪は雪のように白く、目は燃える炎のようで、足は光り輝く真鍮、そして、声が大水の轟のようです。それから、口から鋭い両刃の剣が出ていて、顔が強く照り輝く太陽のようです。ヨハネはこの方を見て、死んだようになってしまいました。けれども、イエス様が右手を置いて下さり、こう言われます。「黙示 1:17-18 恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。」これが、神の力によって生きておられる、ということ。それからイエス様は、七つの教会に語られますが、その多くが教会を裁かれる姿であり、悔い改めを求めておられる姿です。

そして、よみがえりの主が使徒たちに、ご自身の権威を授けられました。ですから、使徒たちにも、力強い働きがあったのです。アナニアとサツピラは、偽善の罪を犯したので、ペテロの前で倒れて息が絶えてしまいました。そして、パウロがキプロスで、地方総督セルギウスを信仰に導こうとした時に、魔術師エリマがそれを妨げようとした時に、パウロは聖霊に満たされて、彼をにらみつけて、言いました。「使 13:10-11 こう言った。「ああ、あらゆる偽りとあらゆる悪事に満ちた者、悪魔の子、すべての正義の敵、おまえは、主のまっすぐな道を曲げることをやめないのか。11 見よ、主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる。」するとたちまち、かすみと闇が彼をおおったため、彼は手を引いてくれる人を探し回った。」これだけの力があるのです。この力をもって、あなたがたのところに臨むとパウロは言っています。

## 2B 信仰の吟味 5-6

<sup>5</sup> あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい。それとも、あなたがたは自分自身のことを、自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか。あなたがたが不適格な者なら別ですが。

午前の礼拝で詳しくお話ししました。彼らのように、自分自身を肉の行いをもてあそんでいるなら、すでに自分は、イエス・キリストの福音の中に立っていないのです。もしかしたら、それだけ罪意識を抱かず、悔い改めることがないのであれば、もしかしたら、信仰そのものがない、ということかもしれませぬ。それが、「不適格な者」という意味です。はたして、信仰の内にあるのかどうか試してみても、実は、そうではなかったということが明らかにされます。人は、その行いによって、その人の信仰が明らかにされます。口でどんなに信仰的なことを言っても、行いにおいてそれを否定するのであれば、実は違ったものを信じていると言ってよいでしょう。

そしてパウロは、「自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか」と言っていますね。このような問題を起こしている人々は、人を見ています。パウロという人を見ています。その人の内にいるイエス・キリストを見ていないのです。そして自分たちは、自己主張していますが、そんなことする必要がないのです。イエス・キリストが内におられるのですから、自分のことはどうでもいいのです。自分を通して、イエス・キリストが見えるはずなのです。それぞれの内におられるキリストを見ていく。そうすることによって、私たちは建て上げられます。

<sup>6</sup> しかし、私たちは不適格でないことが、あなたがたに分かるように、私は望んでいます。

パウロやテトス、他の兄弟たちが、不適格ではない、つまり、キリストにあって語っているということが彼らに分かるようにと願っています。彼らは勘違いをしていました。パウロの内にキリストがおられるということを認めないため、パウロがパウロの権威で語っていると思って、対抗的になっていたのです。神の恵みによって、パウロが使徒として立てられていて、彼ではなく、彼を通してキリストが語っておられるとみないといけません。しかし、神の恵みによって人々に賜物が与えられ、その賜物が用いられる時にこそ、それぞれがキリストの内に建て上げられるのです。

## 2A 完全への祈り 7-10

<sup>7</sup> 私たちは、あなたがたがどんな悪も行うことのないように、神に祈っています。それは、私たちが適格であることを明らかにしたいからではなく、私たちが不適格な者のように見えたとしても、あなたがたに善を行ってもらいたいからです。

使徒たちを不適格な者であると裁いていること自体が、悪です。それで、どんな悪も行うことのないように、と祈っています。これは、パウロ自身が今、自分が適格なのかどうかという名誉にかか

わる問題ではありません。自己弁護をしているのではありません。むしろ、彼ら自身が神ご自身が立てている使徒であるならば、そのような判定は神に対する悪になるからです。モーセのことを思い出してください。彼が立てられていた時に、姉のミリアムが中傷しました。異邦人を妻としているという、一見、肉の弱さに見えるようなものを攻撃の材料にしました。コラの反乱を思い出してください。アロンとモーセが立てられていることに反逆したのですが、四十年間、荒野をさまよわないといけないことが分かった後に、それを行ったのです。つまり、彼らの指導力は全くなっていない。約束の地に連れて行くということは失敗したではないか！という前提に基づいています。

同じように、パウロの働きは、人間的な目で見ると不資格のように見えます。これは、第二の手紙でずっと見てきました。多くの苦しみを受けました。計画を変更せざるを得ない場面もありました。そういった、いわゆる「うまく行っていない」ということに対して、その働き人の良し悪しを図る、という大きな問題があるのです。パウロが、このことを勝利の凱旋に連なっている、さらしものされている捕虜たちに、自分自身を例えました。また、土の器にある神の宝にも例えました。うまく行っていないように見えても、実は神が事を運ばせているのです。それは、彼自身のうちに何か良いものがあるからではなく、彼を通して、内におられるキリストが働いておられるからです。

<sup>8</sup> 私たちは、真理に逆らっては何もすることができませんが、真理のためならできます。

使徒たちの立場をよく説明しています。使徒たち自身が権威や力を持っているということではないのです。彼らが真理に逆らっているのであれば、そんな力は与えられません。何もすることができません。しかし、真理に基づくのであれば、どんなに困難であっても、真実が明らかにされます。これは使徒たちのことではなく、真理、真実についてのことなのです。使徒たちも、いや、すべての人が真理の前にひれ伏すのです。

罪の問題について、いや、良いことについても、今は明らかにされていなくとも、必ず明らかにされます。パウロが、若い牧者テモテにこう言いました。彼の牧会している、エペソの教会で争いを引き起こしている問題を持った人々がいたからです。「I テモ 5:24-25 ある人たちの罪は、さばきを受ける前から明らかですが、ほかの人たちの罪は後で明らかになります。25 同じように、良い行いも明らかですが、そうでない場合でも、隠れたままでいることはありません。」

<sup>9</sup> 私たちは、自分は弱くても、あなたがたが強ければ喜びます。あなたがたが完全な者になること、このことも私たちは祈っています。

パウロの、彼らを育てたい姿勢が強く出ていますね。パウロたちは、自分たちが弱く見えていてもよいのです。自分たちのことは構わないで、彼らが恵みによって強くなることを願っています。コリントの人たちは、パウロたちに対抗している自分たち、そしてパウロも自分たちに迫ってきている、

と見ていたのですが、それはまるで違うんですね。親と子が、対抗し合っていたらちぐはぐですね。親は、自分のことではなく、子がどうなのかだけを気にしています。

そこで、パウロが願っているのが、「完全な者になる」ことです。聖書の言っている、「完全」という言葉。これは、誤解を受けやすい言葉です。全く欠点のない、罪を犯さない状態になる、完璧になることを考えてしまいます。けれども、元々の意味はそうではありません。「整える」という意味に近いです。例えば、ある国が敵と戦う時に、戦闘の準備が十分に整った、という時に使うような「整える」です。マタイ4章21節では、漁師たちが「網を繕っている」とありますが、繕うと訳されているのも、同じギリシア語です。かなり、イメージが変わるのではないのでしょうか？

ここでパウロの言っているのは、こんな感じです。キリストのからだは成長し、神の建物が建てられていっています。それは、使徒たちが、イエス・キリストという土台を敷き、彼らと与えられた御霊の賜物を用いて、建物が建て上げられていっています。その、神の家の建築中に、全く関係のないものが入って来ました。その建築において、賜物を用いて建て上げることに携わっている人が、「あなた、そんな資格ないんじゃないの？」と言いがかりを付けてしまっている状態です。だから、建築が中断しています。だから、早くこの問題について決着をつけないといけません。そうでないと、建物が完成しないのです。キリストのからだの建て上げが再開してほしいのです。それが、パウロがここで言っている、「あなたがたが完全な者になること」であります。

<sup>10</sup> そういうわけで、離れていてこれらのことを書いているのは、私が行ったときに、主が私に授けてくださった権威を用いて、厳しい処置をとらなくてもすむようになるためです。この権威が私に与えられたのは、建てるためであって、倒すためではありません。

先ほども話しましたように、パウロは、この第二の手紙で彼らに悔い改めの猶予を与えているのです。今の悔い改めていないままですと、主に与えられた権威によって厳しい対処をしないといけません。けれども、本来、教会を建て上げるために与えられた権威なのです。パウロはむしろ、自分に与えられている主の権威が、とてつもなく力強いことを知っているからこそ、その力を用いるのに、非常に気をつけているのです。例えば警官が、銃をいつも携帯していますね。これを使用する時を、私たちは普段の生活でめったに目にしていません。ものすごい厳格な規定が、警官の間にあるからですね。たまに事件が起こってニュースになりますが、自分自身が傷を受けても、銃を容易に使用することがないようになっています。そして、人々を銃殺している犯人がいる時に、その人々を守るために、救うために犯人に向かって銃を向けることはあります。それと似ています。パウロは、教会を守るためにその権威を用いるのです。けれども、普段の時は使いません。

ところで私は、「建てるためであって、倒すためではありません」という言葉が大好きです。私たちは、恵みを受けます。知識が与えられます。そして賜物が与えられます。そして、それらを、人を

倒すために使う人々がいます。少し、みことばの使い方が間違っているように見える人に向かって、いかにその使い方が間違っているかを批判し、そしてこれこそが正しい解釈なのだとするところがあります。それぞれに、主から与えられた権威と力があります。それを建て上げるために使うのであり、倒すために使うではありません。

### 3A 愛と平和の神 11-13

<sup>11</sup> 最後に兄弟たち、喜びなさい。完全になりなさい。慰めを受けなさい。思いを一つにしなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。

最後の挨拶の言葉です。そうなんです、このこと、喜ぶこと。完全になること、あるいは、十分に整えられること。これを再開させましょうということです！これが、教会の建て上げです。教会の宛て上げの中では、人々は、次に「慰め」を受けます。教会に来て、争い、妬みがあったら、どうでしょうか？世に疲れている時に、教会に来てなおのこと疲れてしまいます。そして、好色や淫らな行いのような罪があったらどうでしょうか？教会に、深い傷が残ります。そういうものから守られていて、慰めを受けているようにしたいですね。

そして、「思いを一つにしなさい。平和を保ちなさい。」とあります。これも、教会の建て上げの中にある姿です。ある人々は、正しいことを言うことが教会の務めだと勘違いしてしまいます。イエス様のみこころは、そこにありませんでした。ご自身と父が一つであられるように、ご自身にあって彼らが一つになることです。それによって、平和の実が結ばれます。平和というのは、単に対立がないことを意味していません。深い交わりができています。互いにキリストにあって一つであることを体感することです。

その中で、「愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。」とあります。愛が最も大事なものです。コリント第一 13 章で学びました。その愛の神がおられて、そして平和があります。愛と平和の神です。知識は人を高ぶらせるけれども、愛は人を育てるともありましたね。

<sup>12</sup> 聖なる口づけをもって互いにあいさつを交わしなさい。すべての聖徒たちが、あなたがたによろしくと言っています。

「聖なる口づけ」とありますから、ここにはロマンチックなものはありません。当時だけでなく、今も、中東地域や地中海沿岸地域など、かなりの範囲で口づけによる挨拶が交わされます。私たちにとっては、握手みたいなものでしょう。同性同士もちろんしますし、異性の愛でも行われます。けれども、聖なる口づけです。キリストにあって聖なる者とされた中にある、親愛の情です。

それから、「すべての聖徒たち」と言っていますね。第一のコリントの時から、彼らは自分たちの

教会ばかりを見ていました。外に目が向きませんでした。それで内側にあることばかりを見て、党派心がありました。すべての聖徒たちがいて、パウロは、彼らのことも心に留めて、それでコリントの人たちにも語っています。

<sup>13</sup>主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがたすべてとともにありますように。

これが、祝祷と呼ばれるものです。つまり、祝福して祈ることです。三位一体の神が現れています。主イエス・キリストには恵みがあります。そして父なる神には愛があります。それから、父と子にある交わりは、聖霊によって可能にしてくれます。